

小中高における AI活用実態調査

—教育DXとAI時代の学校教育の現在地—

eラーニング戦略研究所
eLearning Strategy Research Institute

目次

調査概要

P.4

サマリ

P.6

1. 教員の約9割がAI活用による効果実感、一方で運用整備には課題
2. 生徒利用は拡大傾向、期待と懸念が併存
3. “AI活用成熟度”が高い学校ほど効果実感・有用性評価も高い
4. まとめ：教育現場におけるAI活用の広がりと今後の課題

調査結果

P.10

1. 教員のAI活用
2. 児童生徒のAI活用
3. 学校の運用体制
4. 課題と今後必要な支援
5. AI活用成熟度別分析

調査概要

調査概要

調査目的	小中高における生成AI活用の実態を調査する。単なる利用率調査にとどまらず、複数設問から「AI活用の成熟度」を定義し、成熟度別の課題や支援要件を明らかにする。 ※本レポートでは、以降「生成AI」を「AI」と表記する。
調査手法	アンケート専門サイトを用いたWebアンケート調査
調査期間	2026年4月20日～4月23日
調査対象者	小学校、中学校、高校の校長、副校長／教頭、主幹教諭、主任教員、ICT担当教員、一般教員
有効回答数	133名
実施主体	eラーニング戦略研究所

サマリ

1. 教員の約9割がAI活用による効果実感、一方で運用整備には課題

- 1 教員の84.2%がAIを校務で利用していることが明らかとなった。利用用途は「会議・報告資料作成」が最多となったほか、「行事・イベントの企画作成」「連絡文書・お知らせ作成」などにも活用されている。
- 2 授業準備における利用率も74.4%に上り、「教材作成」での利用が最も多い。
- 3 利用頻度は「ほぼ毎日」「週数回」が全体の63.1%を占め、学校において日常的に利用されている。「月数回以上」を含めると教員のAI利用率は9割に上る。
- 4 効果実感についても約9割が「効果あり」と回答しており、利用者の多くがAI活用による効果を感じている状況がうかがえる。
- 5 一方で、学校内での利用ルールやガイドライン整備、教員研修の実施については、学校間で対応差がみられた。
- 6 自由記述でも「ルール・ガイドラインが未整備」「指導方法がわからない」との悩みが多く挙げられた。

2. 生徒利用は拡大傾向、期待と懸念が併存

- 1 児童生徒によるAI利用は、「授業で利用させたことがある」（18.8%）、「自主利用を把握している」（25.6%）、「自主利用の可能性はあるが把握していない」（33.8%）という結果となった。
- 2 特に高校では「自主利用の可能性はあるが把握していない」が約4割に上り、校種によって利用実態の把握状況に差がみられた。
- 3 利用用途は「調べ学習」「発表資料作成」「探究学習」が中心であり、情報整理や探究型学習を支援する用途でAIが活用されている状況がうかがえる。
- 4 教員は、生徒のAI利用について「情報活用能力向上」「主体的な学び促進」など教育効果への期待を持つ一方、「思考力低下」「依存」への懸念も抱いている。
- 5 自由記述では「AI利用かどうか判別が難しい」「情報の正確性や精度」に関する不安が目立ち、評価や指導方法への課題認識の高さが読み取れる。

3. “AI活用成熟度”が高い学校ほど効果実感・有用性評価も高い

- 1 本調査では、教員の利用状況・学校のルール整備などをもとに「AI活用成熟度」を4段階に分類した。
- 2 最多は「Lv2：限定導入段階」（43.6%）で、教育現場におけるAI活用は教員の個人利用を中心に広がり始めている段階といえる。一方で「Lv4：組織運用段階」も42.1%を占めており、学校としてのルール整備や研修実施を含めた組織的活用も一定程度進みつつある。
- 3 「Lv3：ルール整備段階」では全員がAI効果を実感し、「Lv4：組織運用段階」では約9割がAIを有用と回答した。
- 4 このようにAI活用成熟度が高いほど、AIの効果実感・有用性評価が高く、懸念内容も「学力低下懸念」から「運用・管理課題」へ移る傾向がみられた。
- 5 AI活用成熟度によって必要とされる支援内容にも違いがみられた。導入初期段階では「教員向け研修」や「活用事例共有」のニーズが高い一方、組織運用段階では「LMS（学習管理システム）連携」など管理機能整備への関心が相対的に高まっている。

4. まとめ：教育現場におけるAI活用の広がりと今後の課題

以上の結果から、教育現場におけるAI活用は、校務効率化や授業準備を中心に着実に広がりつつあり、一部では学校単位での組織運用も進み始めている状況が明らかとなった。

一方で、AIの急速な普及に対し、教育現場における「評価方法」「利用ルール」「指導方法」が十分整理されておらず、学校間・教員間で対応差もみられている。

生徒利用については一定程度広がりつつあるものの、学校側が実態を十分に把握できていない状況もうかがえた。また、思考力低下や評価の難しさ、情報の正確性への不安など、教育現場特有の課題も顕在化している。

成熟度分析では、活用度が高い学校ほどAIの効果実感・有用性評価も高い傾向がみられた一方、懸念内容は「学力低下」から「運用・管理」へと変化しており、活用定着に伴い課題も変化していく様子が確認された。このことから、学校単位でのルール整備や教員研修の実施が、AI活用定着の重要な要素であることが示唆される。

今後は、教員研修や活用事例共有に加え、LMS連携を含む学習基盤との連携や安全な利用環境整備を通じて、教育現場におけるAI活用を継続的に支援していくことが重要になると考えられる。

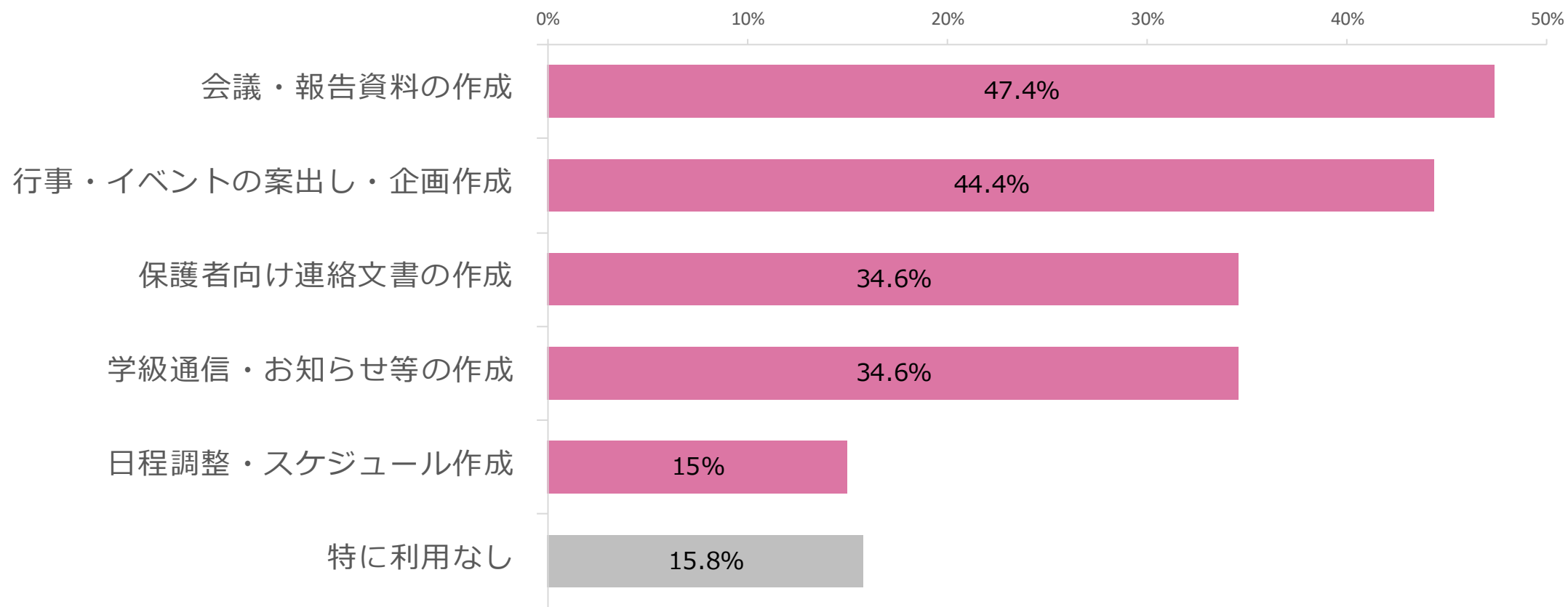
調査結果

1. 教員のAI活用

調査結果

1-1. 校務におけるAI利用用途

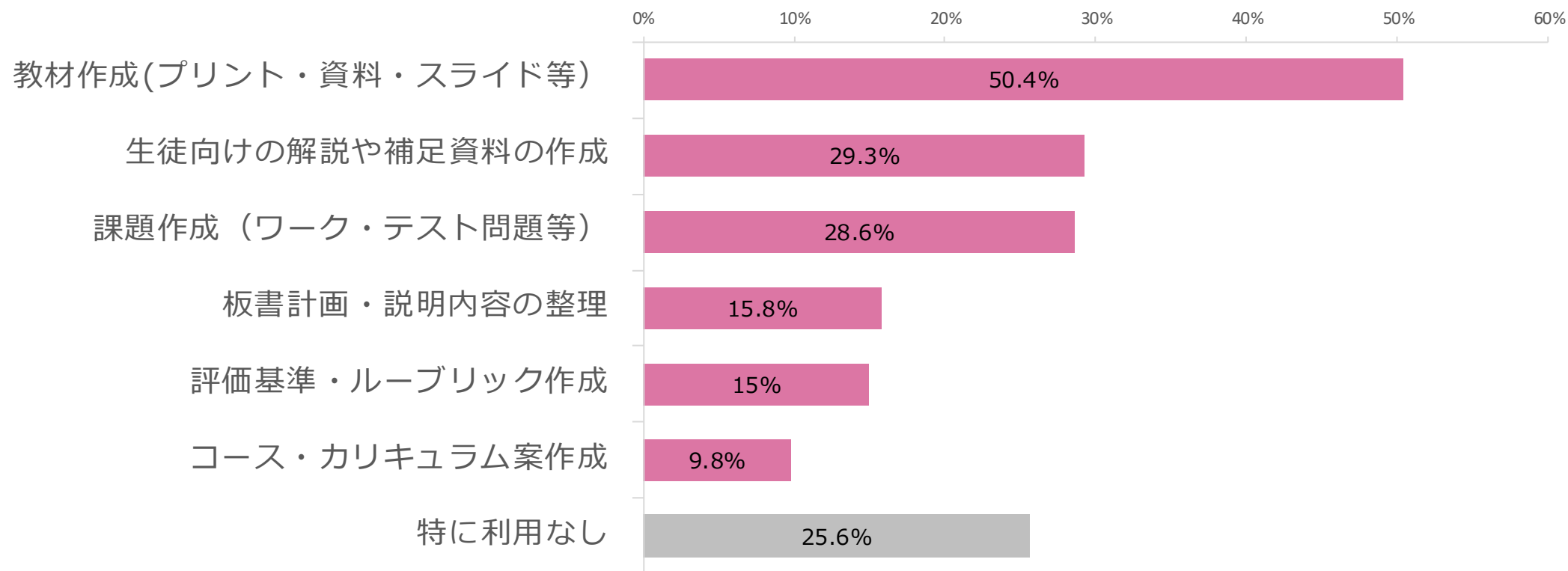
84.2%の教員が校務でAIを活用している。用途は「資料作成」「行事・イベントの企画作成」「連絡文書やお知らせ作成」など幅広い。



調査結果

1-2. 授業準備におけるAI利用用途

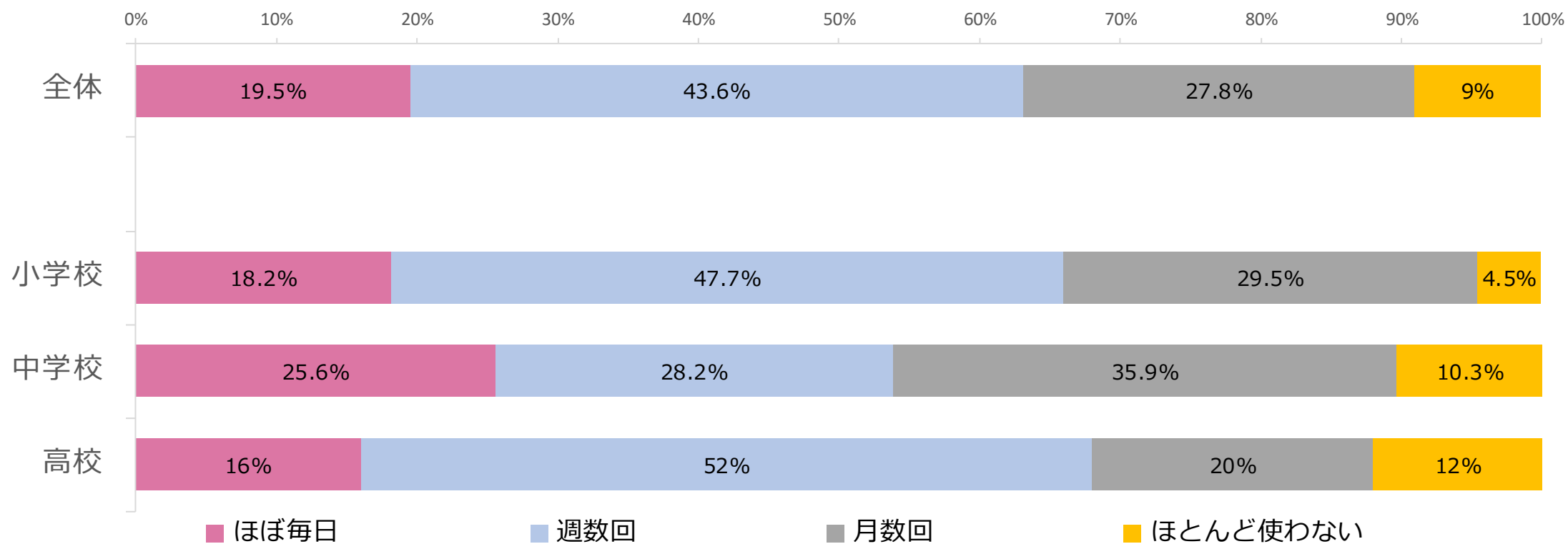
授業準備におけるAI利用率も74.4%に上る。利用用途は「教材作成」（50.4%）がもっとも多い。



調査結果

1-3. AIの利用頻度

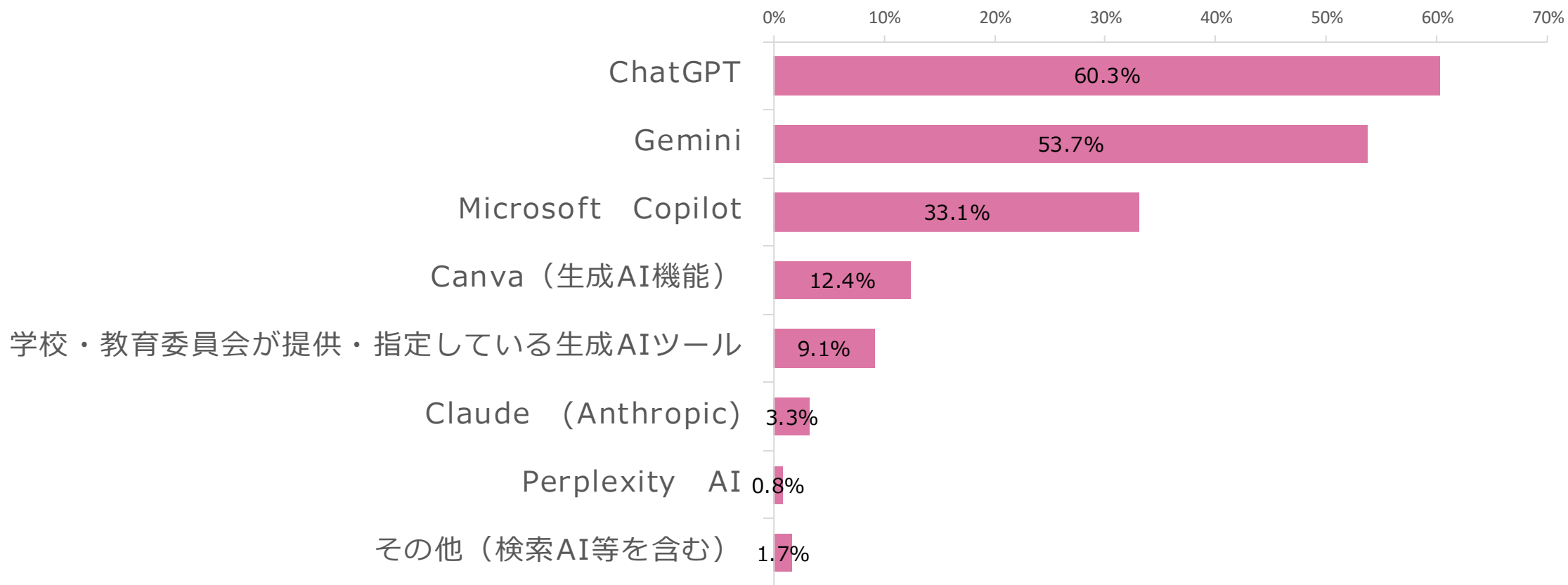
「ほぼ毎日」「週数回」が全体の63.1%を占め、学校において日常的に利用されている。学校種別では高校での利用頻度がやや高い。



調査結果

1-4. 利用ツール

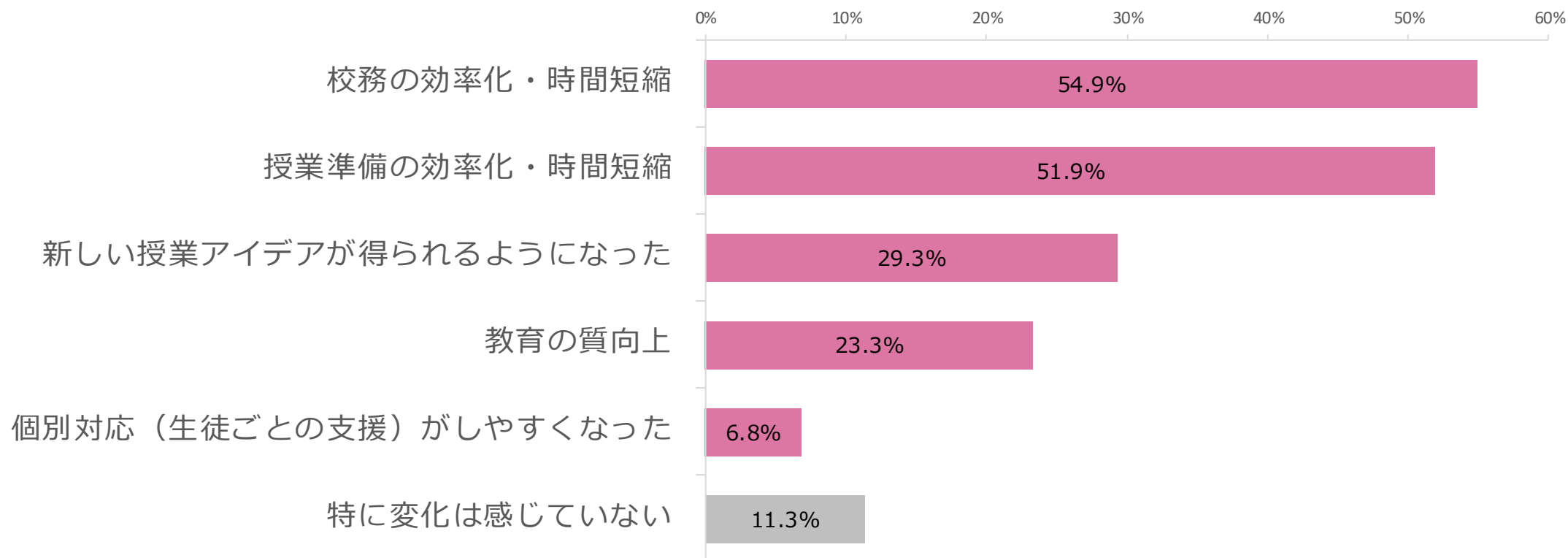
「ChatGPT」「Gemini」の利用率が高く、主要ツールとなっている。



調査結果

1-5. 効果実感

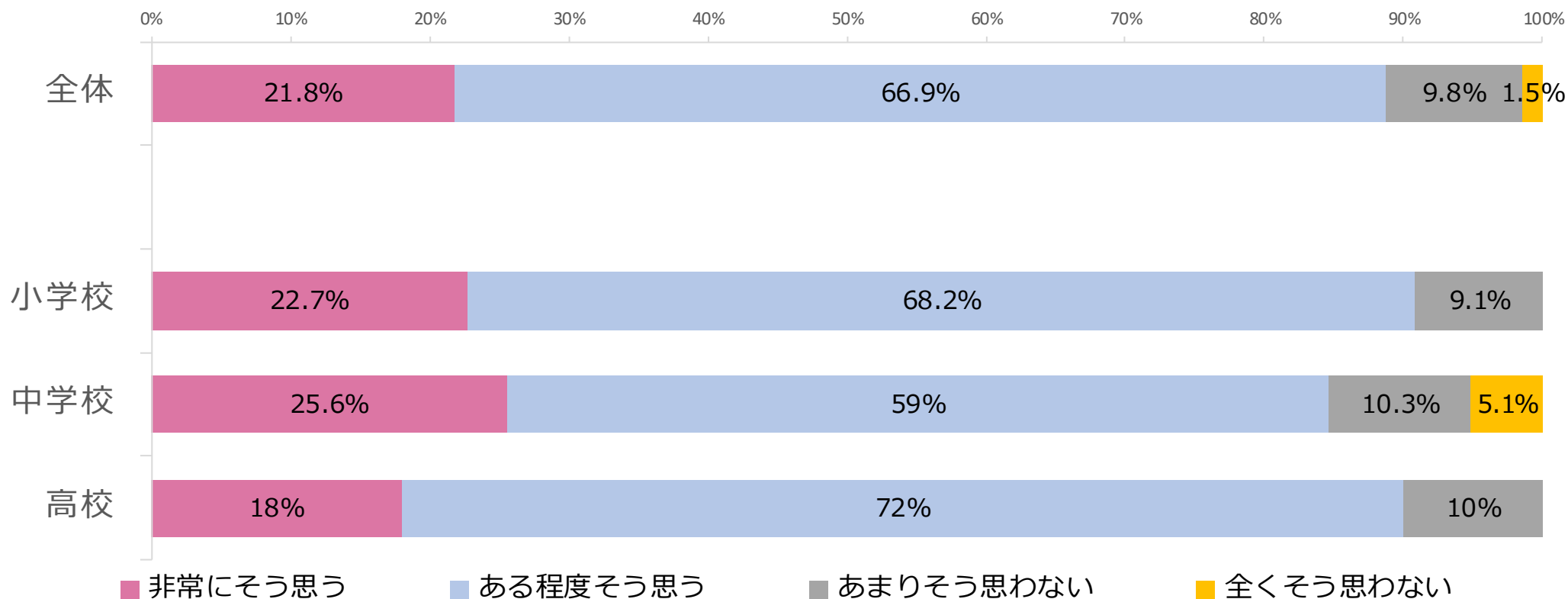
9割近くがAI利用に効果を実感している。とくに「校務・授業準備の効率化」における効果実感が多い。



調査結果

1-6. 有用性

全体の9割近くが「有用」と回答。学校種別で大きな差はみられない。



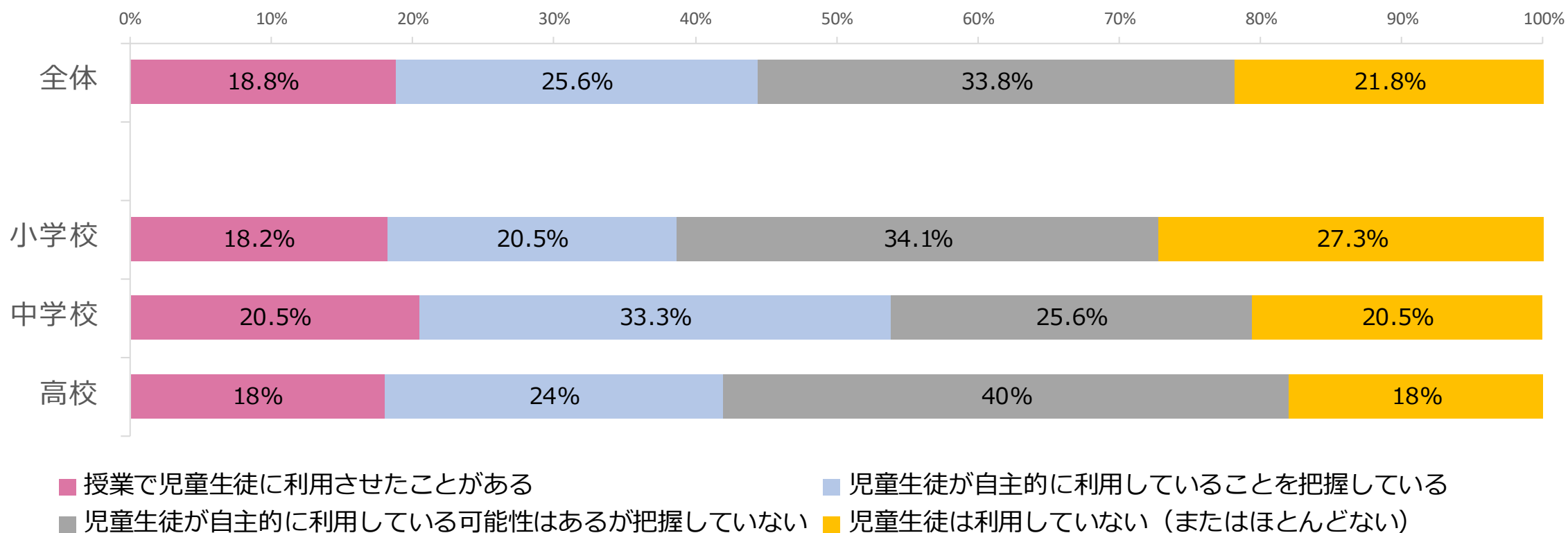
調査結果

2. 児童生徒のAI活用

調査結果

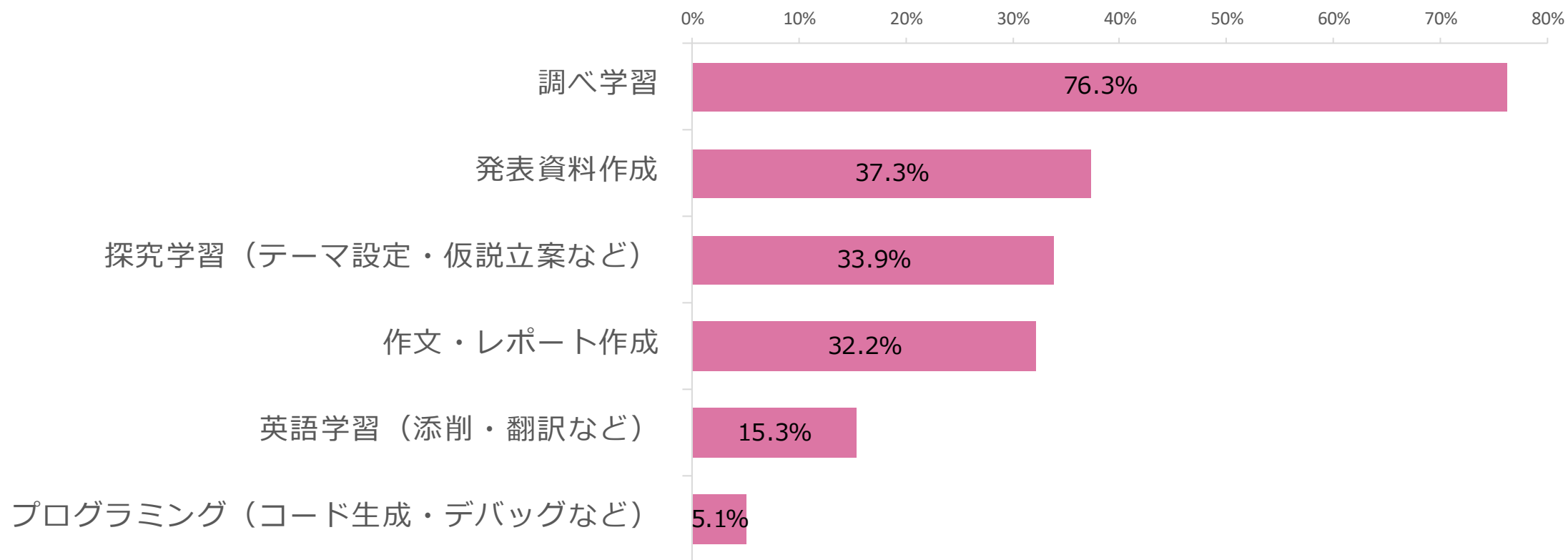
2-1. 生徒利用状況

小学校では「利用していない」が比較的高い一方、高校では「自主利用している可能性はあるが把握していない」が4割に上り、校種によって利用実態の把握状況に差がみられた。



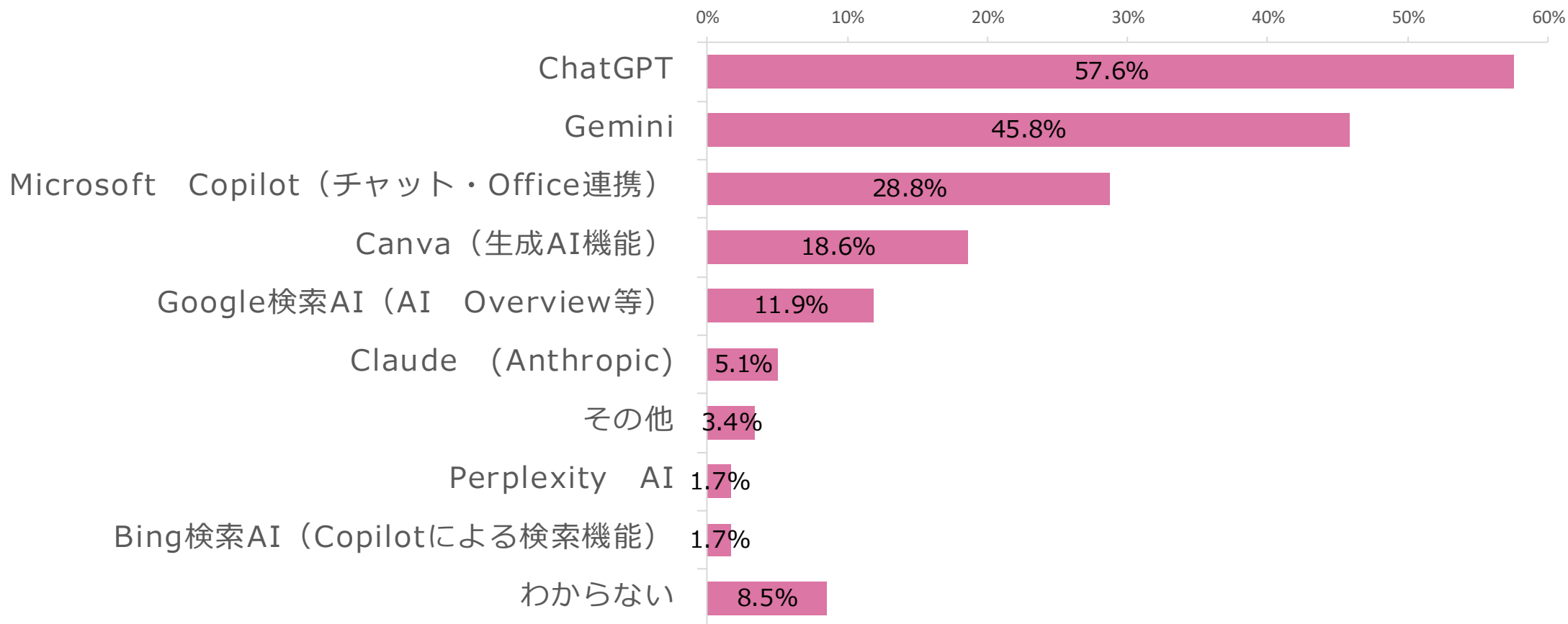
調査結果 2-2. 生徒利用用途

生徒の利用用途は「調べ学習」（76.3%）が最多で、「発表資料作成」（37.3%）、「探究学習」（33.9%）が続く。従来の受動型学習から能動型学習（アクティブ・ラーニング）への移行が進む中、幅広い学習支援にAIが活用されている状況がうかがえる。



調査結果 2-3. 生徒利用ツール

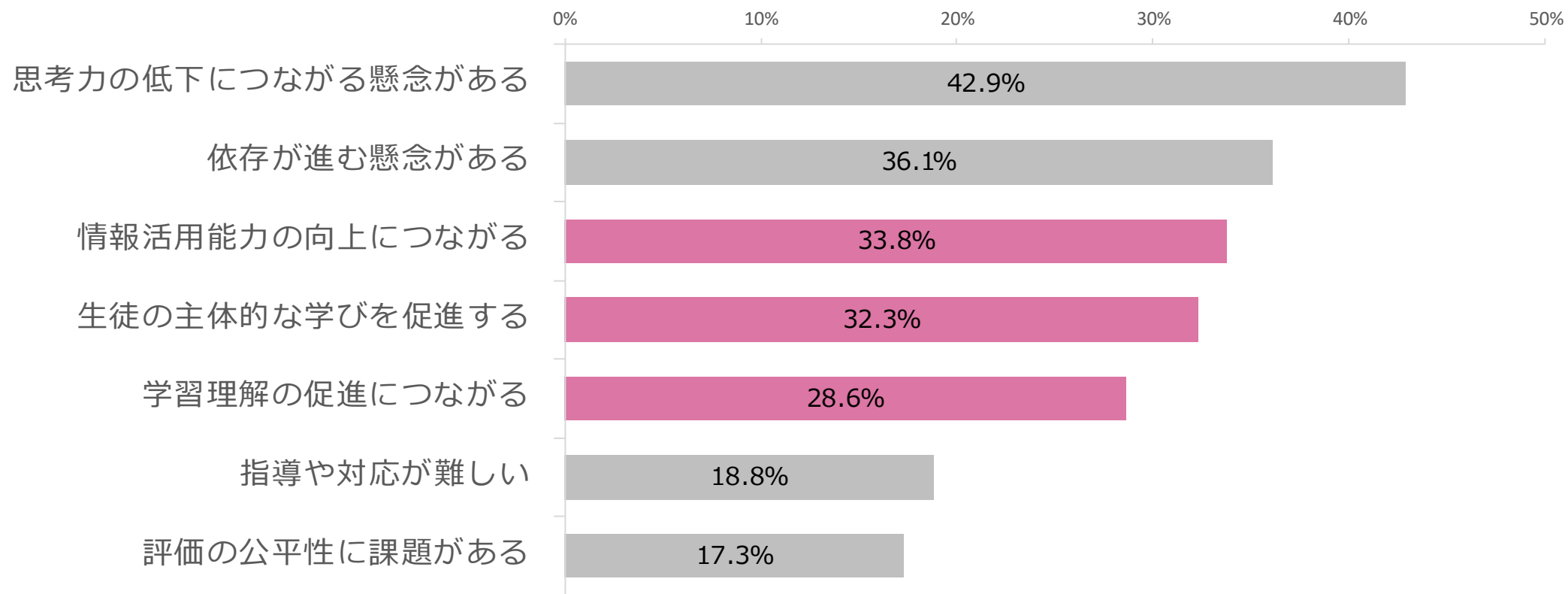
教員と同じく「ChatGPT」「Gemini」が多いが、「Microsoft Copilot」「Canva」「Google検索AI」など、より幅広いAIツールが利用されている。



調査結果

2-4. 生徒利用への評価

生徒利用評価としては「思考力低下への懸念」（42.9%）や「依存への懸念」（36.1%）が上位となる一方、「情報活用能力の向上につながる」（33.8%）など教育効果を期待する声も一定数見られ、期待と不安が併存している。



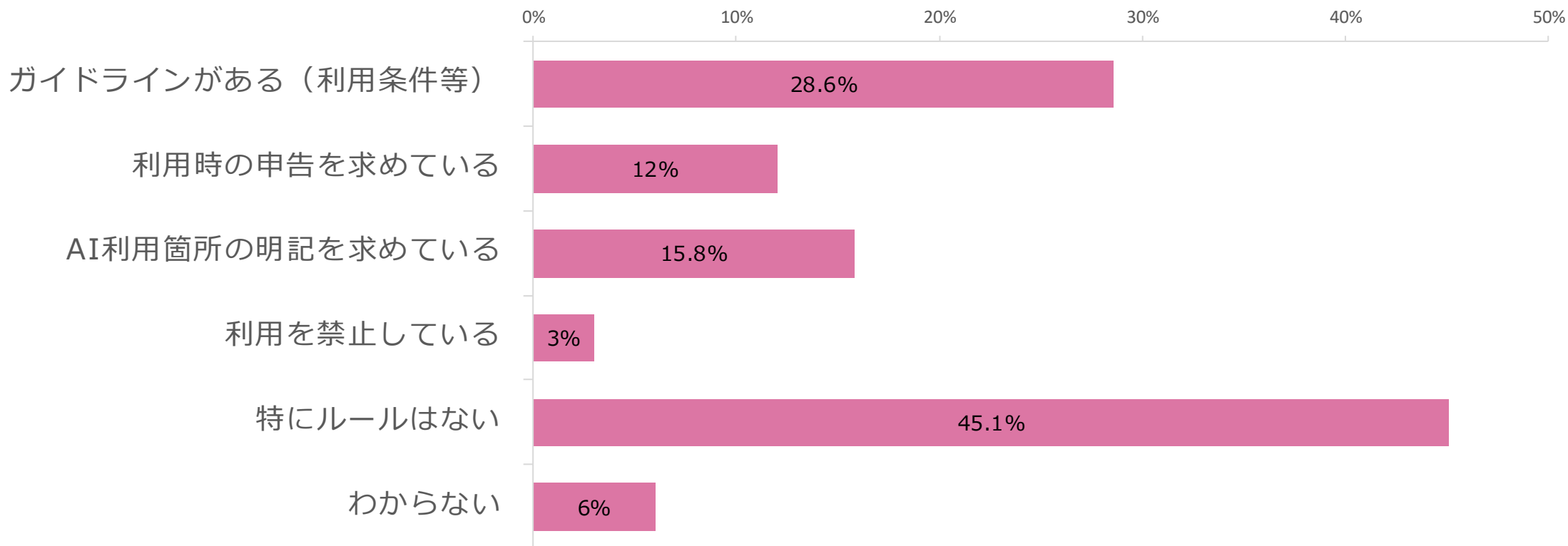
調査結果

3. 学校の運用体制

調査結果

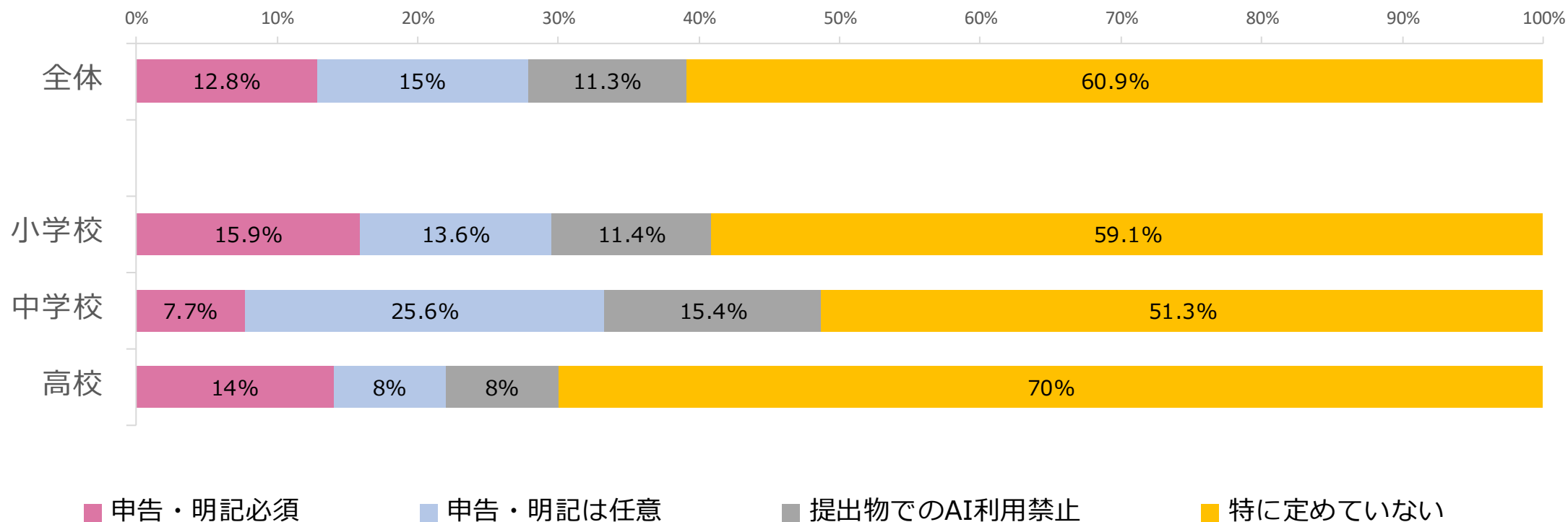
3-1. ルール

「特にルールはない」（45.1%）が最多となり、AI活用が広がる一方で学校としての運用ルール整備は発展途上であることがうかがえる。



調査結果 3-2. 提出物申告

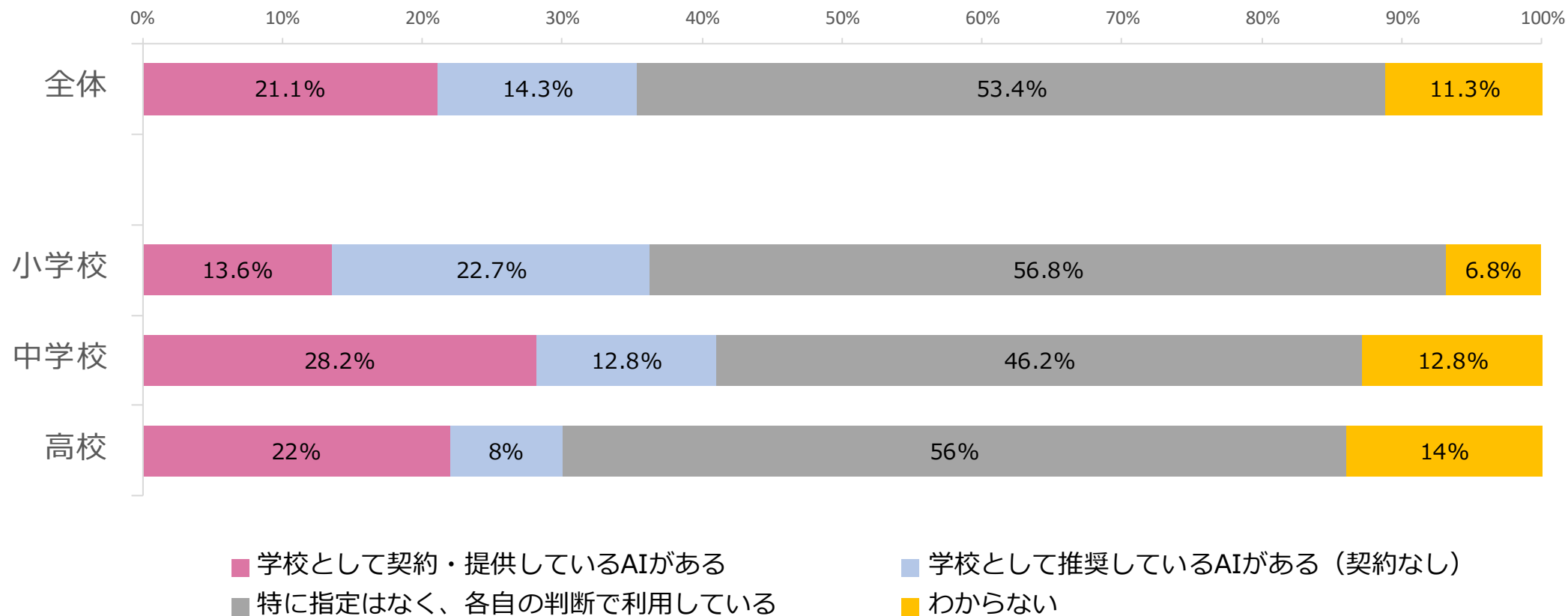
AIを利用した場合の申告や明記は「特に定めていない」が学校種別を問わず最多である。



調査結果

3-3. 推奨ツール

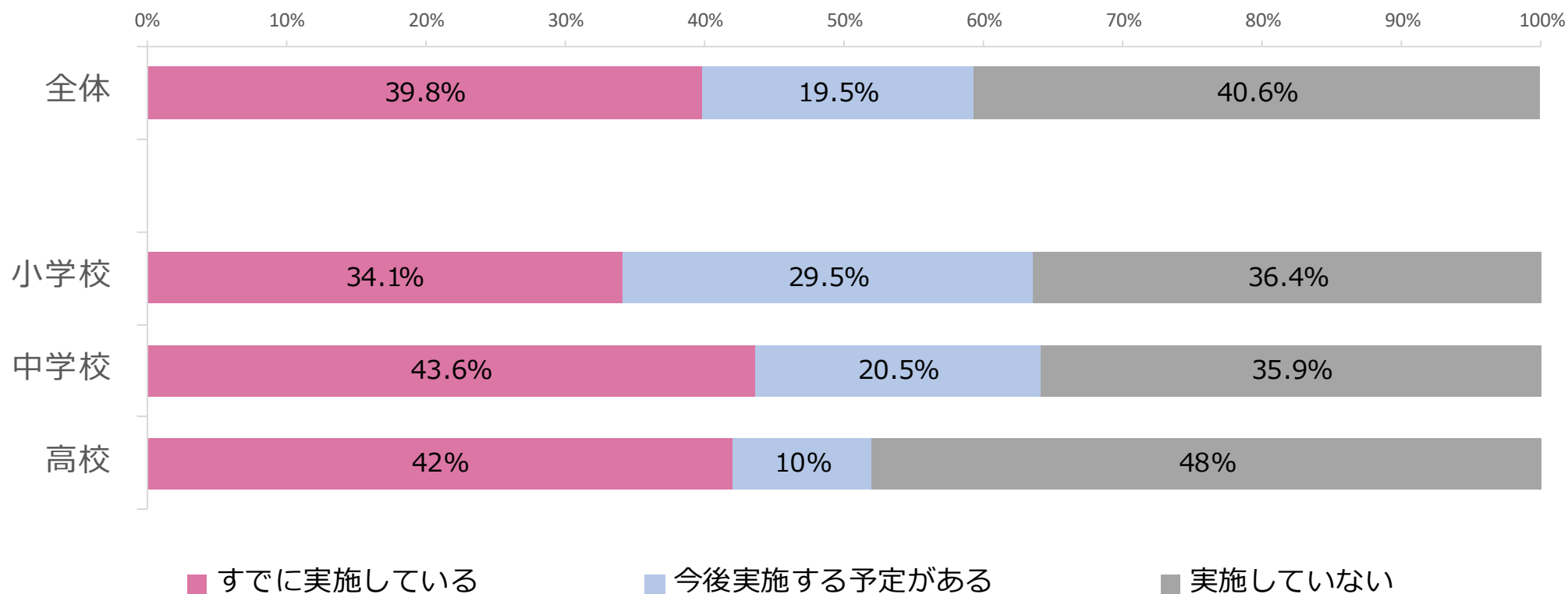
「学校が契約・提供・推奨しているツールがある」割合は学校種別を問わず3～4割程度で、半数超は「特に指定はなく、各自の判断で利用」となっている。



調査結果

3-4. 教員向け研修

小学校・中学校では「すでに実施」「今後実施する」が6割以上に上る一方、高校では「実施していない」が48%と多数派である。



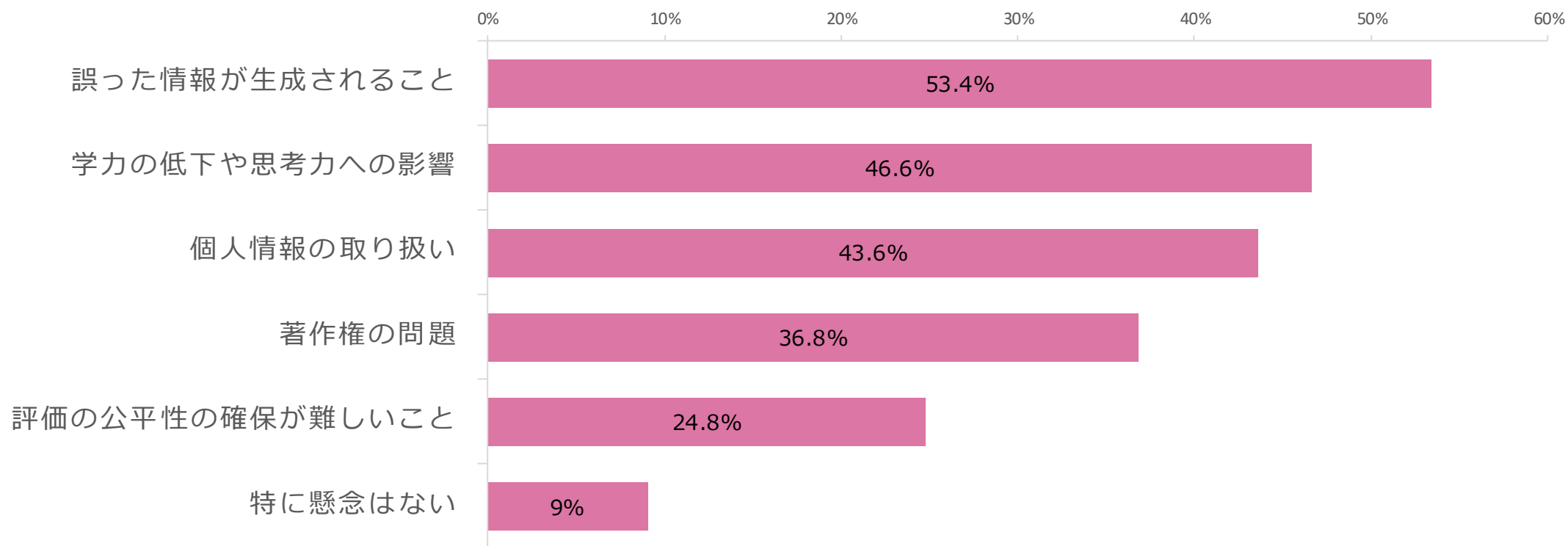
調査結果

4. 課題と今後必要な支援

調査結果

4-1. 懸念

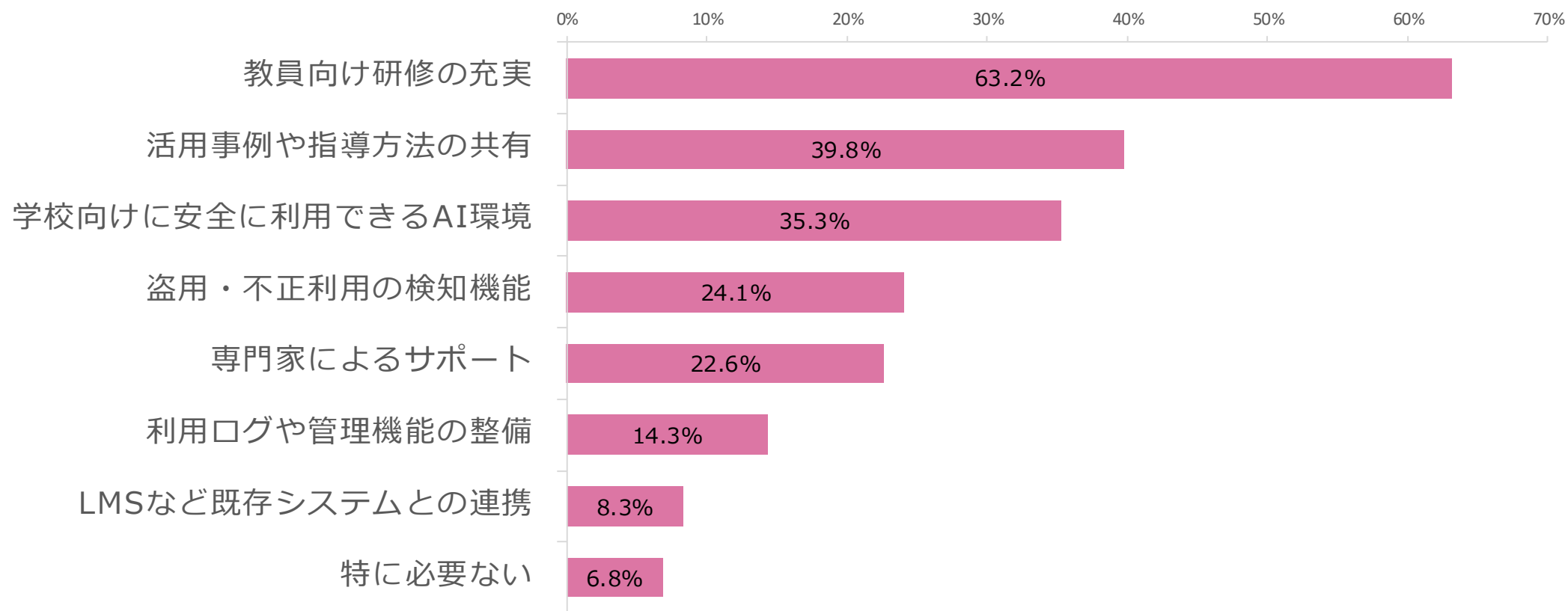
AI活用にあたっては、「誤情報の生成」（53.4%）への懸念が最も高く、「学力・思考力への影響」「個人情報の取り扱い」が続いた。期待がある一方で、教育現場では情報の正確性や適切な利用、評価方法に対する慎重な姿勢もうかがえる。



調査結果

4-2. 必要支援

今後必要とされる支援は「教員向け研修」(63.2%)が最多で、「活用事例や指導方法の共有」「学校向けに安全に利用できるAI環境整備」が続いた。



調査結果

4-3. AI活用における課題（自由記述）

自由意見では、「ルール整備」「活用方法・指導方法」「評価の難しさ」「情報の正確性」などに関する意見が多くみられた。

分類	主な内容
ルール・ガイドライン	学校内ルール、運用基準、禁止範囲など
活用方法・指導方法	効果的な活用法、教員側の指導・研修不足
評価・判別	AI利用判定、成果物評価
情報の正確性	誤情報、真偽確認
依存・思考力低下	考える力の低下懸念
安全性・著作権	情報漏洩、著作権
格差・リテラシー	教員間・生徒間格差

調査結果

4-3. AI活用における課題（自由記述一覧：原文掲載）

1. ルール・ガイドライン整備

- ルール整備（中学校／一般教員、主任、校長）（高校／一般教員、主任、校長）など多数
- ルールの徹底（高校／一般教員）
- ルールがない（小学校／一般教員）
- 正直なところ決まりがないという状態に困惑している（高校／一般教員）
- 指導方法やガイドラインの整備（小学校／主幹教諭）
- ガイドライン作成の困難さ（小学校／主幹教諭）
- 職員で使用の共通理解が図られていない（小学校／副校長・教頭）
- 指針は出ているが具体的運用についての情報が不足している（中学校／校長）
- 現場の対応が、進化に追いついていない（小学校／主任）
- これからはAIを活用する時代だとは理解しているが、どこまで使わせてよいのかわからずルールが曖昧になっている気がする（高校／一般教員）
- 生徒の利用実態の把握（高校／一般教員）
- 子どもたちが家庭で使用しているが、学校現場では使用を禁止しているためバランスが悪い（小学校／主任）
- 勤務している市自体がChatGPTの使用を認めていない（小学校／主幹教諭）
- 使用制限がある（中学校／ICT担当）

2. 活用方法・指導方法

- 使い方がわからない（小学校／一般教員）（高校／一般教員）
- 指導方法がわからない（小学校／一般教員）（中学校／一般教員）（高校／主任）（高校／一般教員）
- どんな事に使えるか、まだよく分かっていない（小学校／一般教員）
- 使い方を知る機会がほしい（小学校／主幹教諭）
- 活用方法（中学校／主任）
- 教育的に効果的な利用方法の模索（中学校／ICT担当）
- 具体的な場面が思いつかない（中学校／主任）
- 効率的な利用ができているか（中学校／一般教員）
- 生徒指導（高校／一般教員）
- 使い方の程度（小学校／ICT担当）
- 使い方の指針が欲しい（高校／一般教員）
- 効果的なプロンプトの指導（中学校／一般教員）
- プロンプト（高校／一般教員）
- 生成AIは、学校現場においては個人的にではなく組織的に進めていかなければ、教師間のズレが生じるので、県の教育委員会が方針や指針を示して教員向けの研修等を行う必要があると思う（高校／一般教員）

3. 評価・判別の難しさ

- 評価の難しさ（小学校／一般教員）
- 評価に向いていない（高校／一般教員）
- 本人が書いたものでないので評価が難しい（小学校／一般教員）
- 自分で考えたことを評価したいのに、生成AIが考えたことを自分のものだと出してきた時の対応、評価の仕方について（小学校／一般教員）
- 個人の考えなのか、生成AIを使った考えなのか、区別できるのか不安（小学校／主任）
- 子供が考えたかどうか把握しにくい（小学校／主任）
- 生徒自身が制作したのか、生成AIが制作したのか判断しにくい（中学校／一般教員）
- 生徒の文章がAIで作成されたかの客観的判断ができないこと（中学校／主幹教諭）
- 生徒が作成する作品中にAIを利用したものがあってもなかなか判別できないこと（中学校／一般教員）
- 課題提出が生徒の力かAIに頼ったかが不明（高校／主任）
- 一目見て生徒が考えていないだろうとわかる高度な内容とは別に、すぐには判別できないレポートの内容が徐々に出始めている（高校／一般教員）
- ルールがないことや、生徒が作成した課題などがAIによるものであるかどうかを判断する術がないこと（中学校／主任）
- 生徒が課題で使用していたとしてもこちらで全てを把握できない（中学校／一般教員）
- プリント、テスト作成などで使用した場合は、生徒自身が作成する対策プリントなどと出題が同じになる可能性がある（高校／一般教員）

4. 情報の正確性・真偽への不安

- 正しい情報の見極め（小学校／一般教員）
- 見極め（高校／一般教員）
- 確かなものを見極める力（中学校／主幹教諭）
- 正確性（小学校／主幹教諭）
- AIの精度（小学校／主幹教諭）
- 誤りが多い（中学校／主幹教諭）
- 間違いがないかどうかの検証が難しい（中学校／一般教員）
- 正しい情報かどうか検証する必要がある（高校／一般教員）
- 真偽の判断（高校／一般教員）
- 真実かどうか（高校／一般教員）
- 文章力で答えが微妙に変化することです（小学校／一般教員）
- 情報の正確性・精度にはまだ問題・課題があると思う。利用もそれを土台にして利用しているので、内容そのものを利用しているわけではないので（高校／一般教員）

5. 依存・思考力低下

- 考えることが出来なくなること（小学校／校長）
- 思考力の低下（中学校／主任）
- 使用の仕方によっては学力低下につながる（小学校／一般教員）
- 自分で考えない生徒が増える（中学校／一般教員）
- 自分で作成しないで頼ってしまう（小学校／主幹教諭）
- 生徒が課題解決をする際に過度に依存してしまう（中学校／主任）
- 生成AIへの依存（高校／校長）
- しっかり考えずに安易に使用すること（中学校／一般教員）
- 使い方について。遊んでしまう（小学校／主任）
- 教育には確固たる正解ばかりがあるわけではないからこそ、さまざまな選択肢は使いたい。ただ依存はかなり不安（中学校／主任）

6. セキュリティ・著作権・個人情報

- 著作権関連のこと（小学校／一般教員）
- 著作権やプライバシーへの配慮の指導が難しい（小学校／一般教員）
- セキュリティー面や著作権の課題が解消されていませんね（小学校／一般教員）
- 校務での利用では情報漏洩が心配である（中学校／主任）
- 安全性に不安がある（高校／一般教員）
- 安全性への不安（高校／一般教員）
- 不安（高校／主任）
- 児童が使用する際のルール、個人情報を扱う際の流出の恐れ、生成されたもののファクトチェック体制（小学校／一般教員）
- 安定性への不安、格差の拡大（小学校／一般教員）

7. 格差・リテラシー

- スキルのある子とない子との差が大きい（小学校／主幹教諭）
- 全生徒が同じように利用できるとは限らない事（中学校／主任）
- 教員間の格差（高校／校長）

8. 活用期待・有用性

- 文書作成等で非常に有用（高校／主任）
- 過去に例のない内容の為に、そもそも「教える」ではなく「共に学ぶ」という意識をより強く持つ必要があると感じる（小学校／主任）

調査結果

5. AI活用成熟度別分析

調査結果

5. AI活用成熟度別分析

ここまでの調査結果を踏まえ、学校における“AI活用成熟度”を4段階に分類し、活用実態・効果・課題・必要支援の違いを分析した。

成熟度	概要
Lv1：教員未活用段階	教員による校務・授業準備でのAI活用は未実施
Lv2：限定導入段階	一部教員が校務・授業準備でAIを個人利用
Lv3：ルール整備段階	ガイドライン・利用ルールを整備
Lv4：組織運用段階	研修・推奨ツール等を含め組織運用

【本調査における成熟度定義】

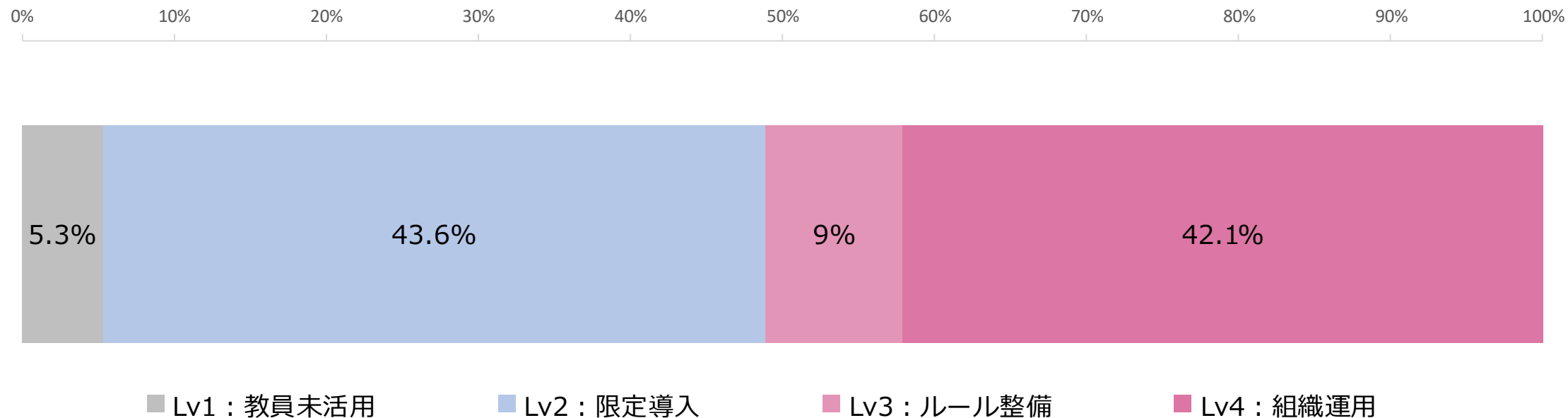
成熟度定義には本調査の「校務利用」「授業準備利用」「ルール整備」「推奨・契約ツール」「教員研修」の5項目を使用した。
なお、本調査における成熟度は学校全体のDX成熟度ではなく、AIに関する利用・運用状況をもとに分類したものである。

調査結果

5-1. AI活用成熟度の構成比

限定導入段階（Lv2）が43.6%と最も多く、AI活用は個人利用を中心に広がり始めているフェーズといえる。

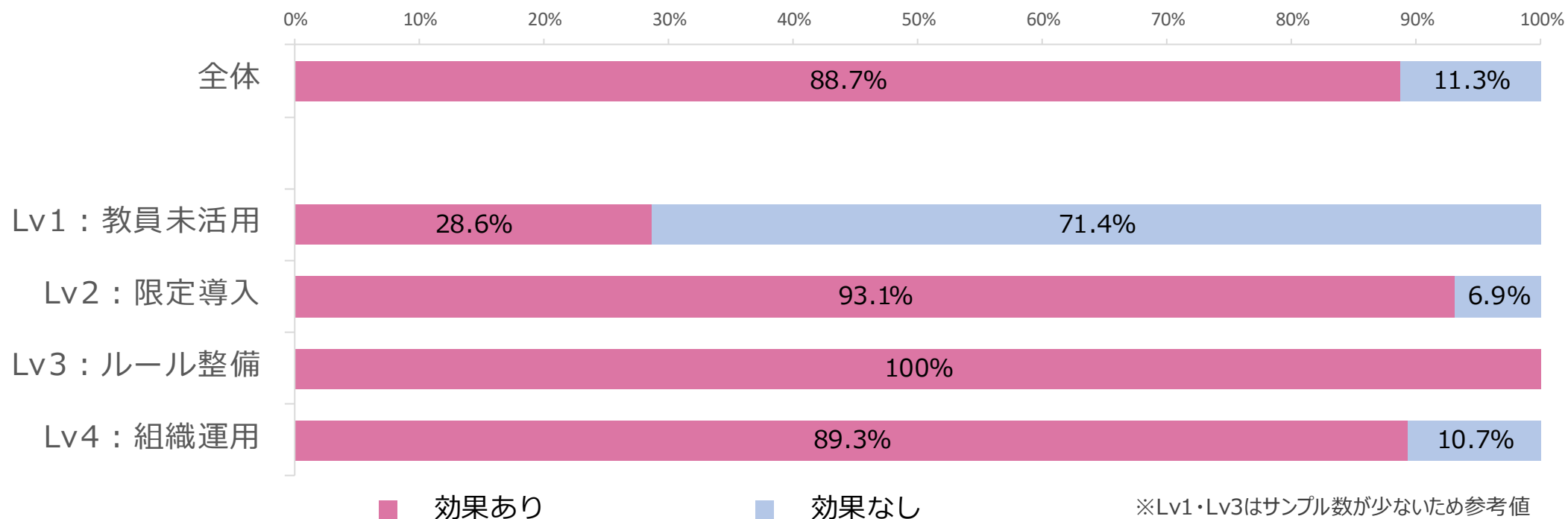
一方で、組織運用段階（Lv4）も42.1%を占め、学校としてのルール整備や研修実施を含めた組織的活用も一定程度進みつつある。



調査結果

5-2.【分析】AI活用成熟度×効果実感

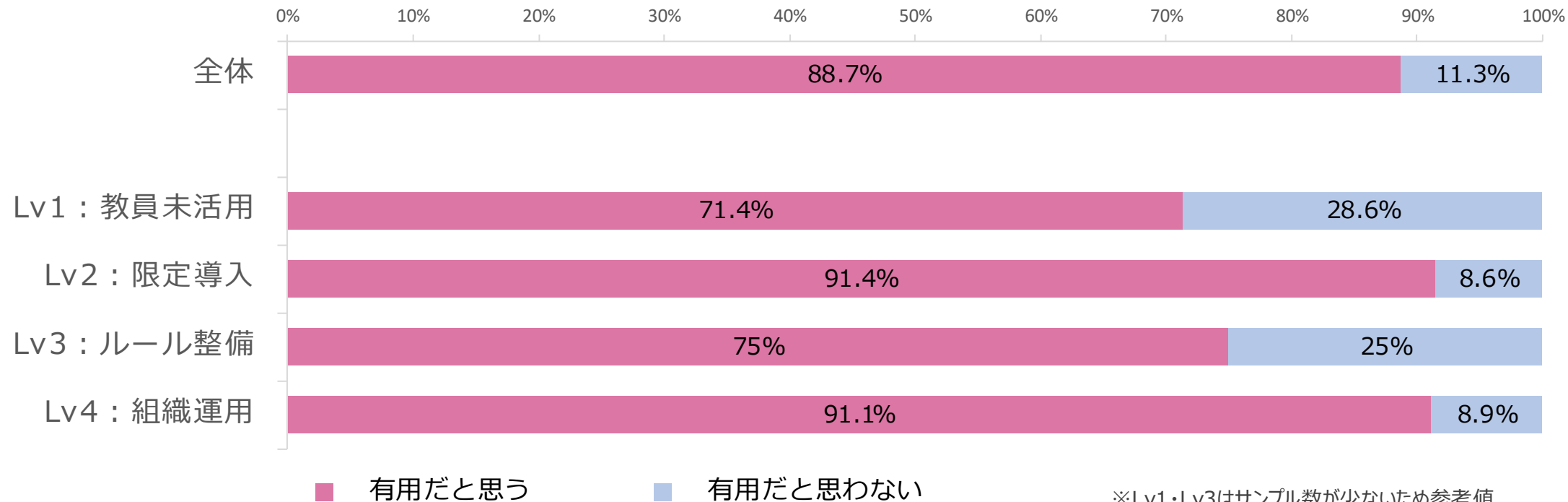
AI活用成熟度別に効果実感を見ると、教員未活用段階（Lv1）では「効果あり」が28.6%にとどまった一方、限定導入段階（Lv2）以降では約9割が効果を実感していた。一定の活用・運用体制が整うことで、AIの効果実感が高まる傾向がみられる。



調査結果

5-3.【分析】AI活用成熟度×有用性

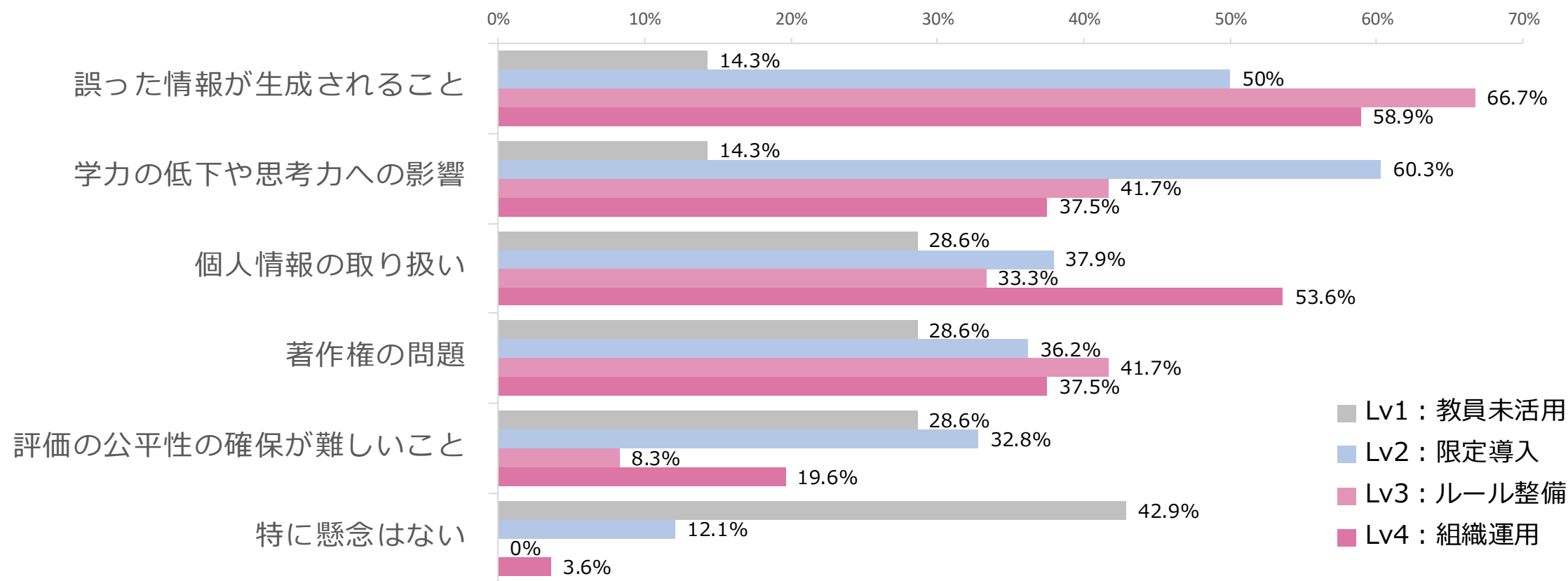
教員未活用段階（Lv1）では「有用だと思う」が71.4%にとどまった一方、組織運用段階（Lv4）では91.1%が「有用だと思う」と回答している。このように、AI活用の成熟度向上は単なる利用拡大ではなく、効果実感や有用性評価の向上にもつながっている。学校単位でのルール整備や研修実施が、AI活用定着の重要な要素であることが示唆される。



調査結果

5-4.【分析】AI活用成熟度×懸念

AI活用成熟度によって懸念内容にも違いがみられた。活用初期段階では「学力低下や思考力への影響」への懸念が高い一方、組織運用段階（Lv4）では「誤情報の生成」や「個人情報の取り扱い」など、運用・管理面の課題への意識が高まる傾向が読み取れる。

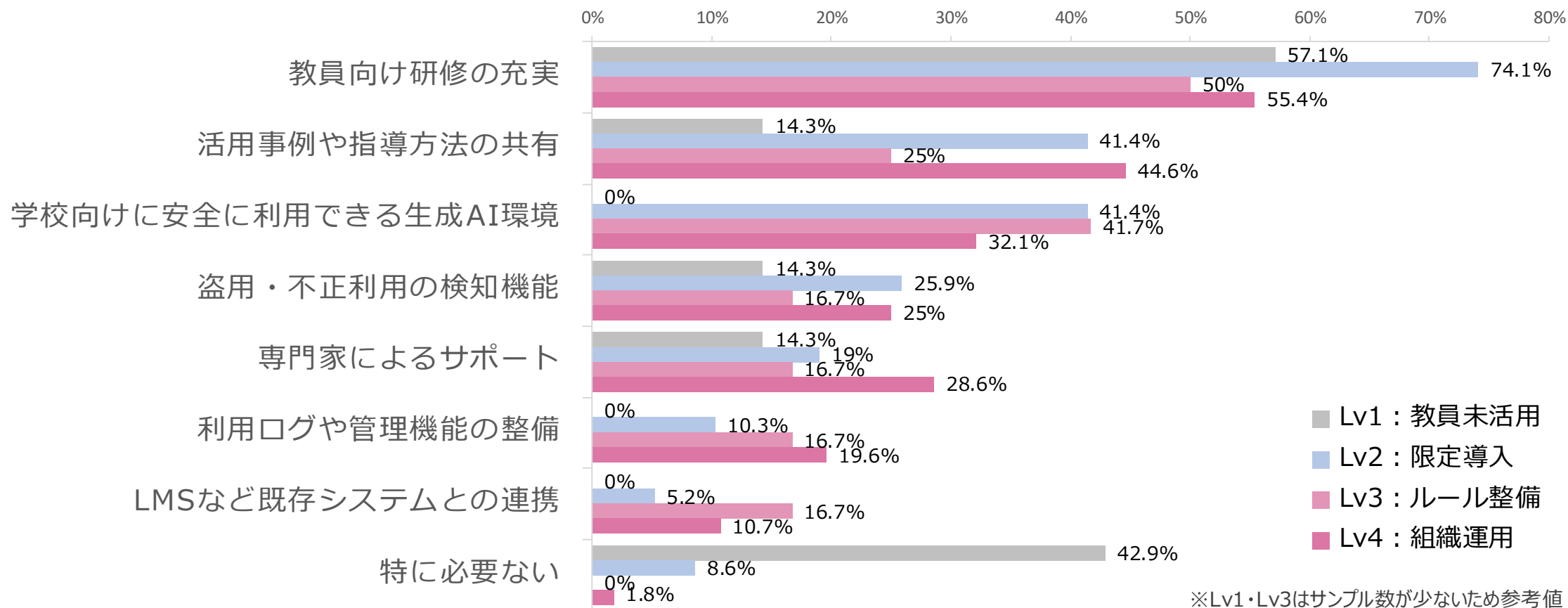


※Lv1・Lv3はサンプル数が少ないため参考値

調査結果

5-5.【分析】AI活用成熟度×必要支援

導入初期段階では「教員向け研修」や「活用事例共有」のニーズが高い一方、活用が進んだ段階では「LMS連携」や「管理機能整備」への関心が相対的に高まる傾向がみられた。



小中高におけるAI活用実態調査報告書

デジタル・ナレッジ 調査



2026年6月発行

発行元：株式会社デジタル・ナレッジ「eラーニング戦略研究所」

〒110-0005 東京都台東区上野5丁目3番4号 eラーニング・ラボ 秋葉原

Tel. 03-5846-2131／Fax. 03-5846-2132

<https://www.digital-knowledge.co.jp/>

(禁無断転載・転用・複写)